

『自分のため』以外に、プレーする意味を周囲からいただいています

立川玄明
RBパナソニック株式会社
エレクトリックワークス社
ライティング事業部勤務

— Xリーグの強豪、パナソニックインパルスはどんなチームなのか。選手やスタッフが学生時代に抱いていた印象と、一員となって体験した実際の姿、そして、インパルスの一員であることが自分にとってどんな意味を持っているのかを語る。2020年度立命館大主将で、昨年は新人ながらパワフルなランで存在感を發揮したRB立川玄明は、インパルスの一員になってフットボールをプレーする新たな意味を得ることができたと言う。

— 大学生の時、パナソニックインパルスでプレーすることを選んだ理由を教えてください。

立川 就職活動を始めた頃は、仕事とフットボールを分けて考え、どこかの企業に就職してクラブチームでプレーしたいと考えていました。当時は勝手なイメージで、

チーム全員が一つの組織に所属している実業団は、大学のクラブ活動とそう変わらないのではないかと考えていたからです。社会人になつたら仕事も頑張りたいと思つていたので、クラブチームの方がフットボールと仕事が完全に切り離されている分、頑張れるのではないかなと考えていました。それにインパルスはなんだか堅いイメージがあったので、自分には合わないのではないかなと勝手に思っていました。

— その考えが変わったきっかけは？

立川 就職活動のことを真剣に考えていた時に、インパルスOBのコーチの方からインパルスが仕事とフットボールの両方を一生懸命できる環境だという話を聞きまして。一社員としてしっかりと評価してくれるという話もうかがい、

仕事の内容もとても興味深いものでした。4年時は主将をやらせてもらいましたが、就職活動でチームの活動を抜けることを極力避けたいという気持ちもありました。4年生の仲間には理解してもらえませんが、下級生にとっては理解できない部分もあると思うんです。もしかしたら、自分のこと優先みたいに見られてしまいかもしれない、それは日本一を目指して心一つにしようとしているチームにとって少しでもマ

— その考えが変わったきっかけは？

立川 就職活動のことを真剣に考えていた時に、インパルスOBのコーチの方からインパルスが仕事とフットボールの両方を一生懸命できる環境だという話を聞きまして。一社員としてしっかりと評価してくれるという話もうかがい、



Hiroaki Tatsukawa

たつかわ・ひろあき。1998年11月16日生。幼少期から中学時代までは野球に取り組んでいたが肘の負傷をきっかけに大阪産業大学附属高校進学時にフットボールをはじめ。高校時代から大型RBとして活躍。立命館大時代は1年時から主力として出場し、4年時には主将を務めた。ルーキーイヤーの昨年はチーム2位の21回走287ヤード3TDを記録。



パナソニック インパルス 検索

panasonic.co.jp/ew/go-go-impulse/

Facebook
www.facebook.com/
PanasonicImpulseTwitter
@gogo_impulse